

旧カリキュラムにおける学芸員養成課程での学びの経験による 博物館および博物館に関連する興味関心の変化と 博物館・学芸員の役割に関する考察

江水是仁

1. はじめに

東海大学湘南校舎では、毎年約 60 名が学芸員養成課程を修了し、学芸員有資格者を輩出している。東海大学の学芸員養成課程で取得しなければならない単位は卒業単位に含まれないため、学芸員資格取得の動機なども、取得する理由がある程度明確であり、具体的な将来のキャリア形成に対する自覚などがあると思われる。

学芸員養成課程では、学芸員として身につけておくべき最低限の知識と経験を教育している¹⁾。なかでも学芸員養成課程の総仕上げとして、最終学年において、実際の博物館に赴いて実習を行っている。博物館での実習は、博物館の実態を体験することができる絶好の機会であり、実習に参加した受講生も、大学の講義では得られない様々な経験をすることで、意義深い学びがあったと思われる²⁾。

今回、学芸員資格取得することで、具体的な将来のキャリア形成に対する自覚が比較的確立されていると思われる学芸員養成課程、とりわけ博物館実習の経験をした受講生に対し、博物館や、博物館活動の主體的な役割を担っている学芸員の役割に関してどのようなことを感じたのかを把握・分析し、受講生のキャリア形成やこれからの博物館、学芸員のあり方に対してどのようなことを感じたのかを明らかにしたい³⁾。それらの成果をもとに、最終的により充実した学芸員養成教育を図るための知見を得たい。

2. 研究の方法

学芸員養成課程のすべての科目を修了した受講生に対し、東海大学湘南キャンパスでは全体事後指導を 12 月から 1 月にかけて行っている。ここでは、学芸員養成課程を修了し、かつ博物館実習を経験したことにより、現在求められる博物館や学芸員の役割を、数名のグループに分けて討論する、ということを行っている。その際、討議のために受講生自身、博物館実習や学芸員課程での学びを通して博物館や学芸員の役割を事前にレポートとしてまとめるよう指示し、回収している。また全体事後指導終了時に、博物館学芸員課程での学びや、全体事後指導による討議を経たうえで、改めて博物館や学芸員の役割に関する受講生の認識をアンケート調査により行っている。

今回は、2012 年度～2014 年度において、全体事後指導終了時に回収したアンケート調査項目の中で、学芸員養成課程での学びにより、①受講生自身の博物館及び博物館に関連する興味関心がどのように変化したのか、②博物館の役割にはどのようなものがあるのか、③学芸員の役割にはどのようなものがあるのか、を中心に分析する。

なお、2012 年度より、東海大学では新しいカリキュラムに基づく学芸員養成課程が始まった。今回の調査は、それ以前の旧カリキュラムに基づく学芸員養成課程で学んだ受講生である。

アンケート調査の有効回答数は、2012 年度 63 名、2013 年度 67 名、2014 年度 53 名、合計 183 名である。回答率は約 9 割である。

3. 学芸員養成課程受講生の博物館及び博物館に関連する興味関心の変化

学芸員養成課程で学んだ経験が、博物館及び博物館に関連する興味関心にどのような変化をもたらしたのかを明らかにする。

ここでは、①博物館そのもの（博物館活動、博物館学、博物館見学頻度）、②生涯学習（生涯学習活動、博物館以外の生涯学習施設利用頻度）、③博物館を取り巻く社会（地域社会、地域貢献）、④博物館行政や博物館をめぐる世界情勢（文化行政、世界情勢、政治）、⑤博物館資料（文化財保護、自然環境、科学技術、生物多様性、芸術アート）、に関連する興味関心などが、学芸員養成課程で学ぶことによりどのように変化したのかを、3段階評価（増えた、変化なし、減った）によるアンケート調査をまとめた。すべての項目の有効回答数は183であった。（図1）。

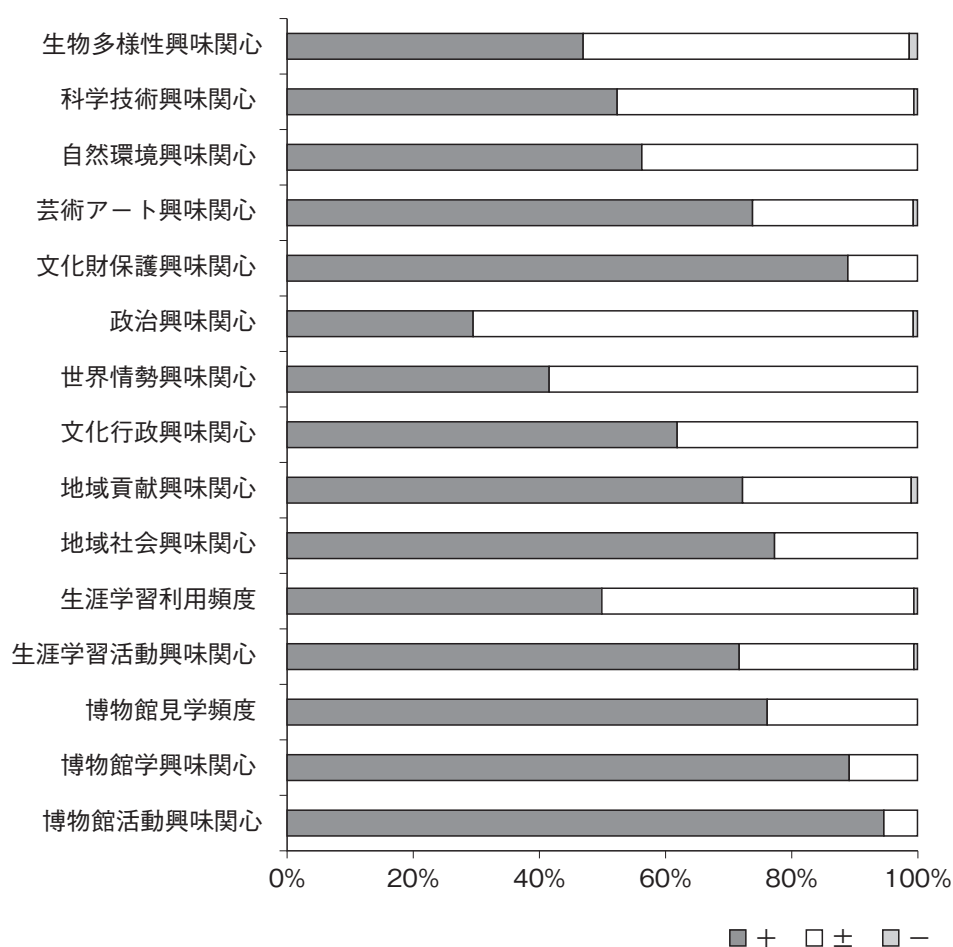


図1 学芸員養成課程修了者の興味関心の変化

その結果、

①博物館そのものに関する変化は、3項目すべてで興味関心や頻度が高まって（増えて）いる。とりわけ博物館活動と博物館学に関する興味関心は、9割ほどの受講生が高まったと回答していた。

②生涯学習に関する変化は、博物館活動に関する興味関心ほど多くはないが、7割ほどの受講生が高まったと回答してはいるものの、博物館以外の生涯学習施設利用頻度が増えたと回答した受講生は5割ほどであった。

③博物館を取り巻く社会に関する変化は、地域社会に関する興味関心、地域貢献に関する興味関心がともに7割ほどの受講生で高まったと回答していた。

④博物館行政や博物館と世界情勢に関する変化は、文化行政に関する興味関心において、6割ほどの受講生が高まったと回答したものの、博物館をめぐる世界情勢や政治に関する興味関心は、3～4割程度であった。

⑤博物館資料に関連する変化は、受講生が所属する学部学科の専攻の違いや、博物館実習先で扱っている資料の違いなどが大きく影響するものの、文化財保護に関する興味関心が9割ほど、芸術・アートに関する興味関心も7割ほどの受講生が高まったと回答していた。

本来であれば、すべての項目において興味関心や利用頻度が高くなる（増える）回答を期待したいところであるが、全体的に見て興味関心や利用頻度の変化が見られない項目もあった。

4. 学芸員養成課程受講生の博物館の役割について

学芸員養成課程で学んだ経験により、博物館の役割について、受講生はどのように認識しているのかを明らかにする。

ここでは、学芸員養成課程を通して博物館の役割について変化の有無を明らかにし、変化があった受講生に対してその理由を自由記入欄にて記入する方法で回答を収集した。その回答内容を分析する。

まず変化の有無を見てみると、有効回答数183のうち、179（97.8%）が変化有と回答した。そのうち、自由記述による回答が見られたのは179（100%）であった。

自由記述としてその理由が明記された内容を分析し、分類を試みた。その結果（表1および図2）、

- ①博物館を取り巻く他者とのつながりに関する認識の変化（56名、31.3%）
- ②博物館活動を主体的に担う学芸員に対する認識の変化（49名、27.4%）
- ③具体的な博物館内の活動に関する変化（28名、15.6%）
- ④漠然とした変化（24名、13.4%）
- ⑤博物館経営に関する認識の変化（22名、12.3%）

に分類できた。

これらの分類をさらに詳細に見てみると（表2）、①に関しては、Ⅰ来館者とのコミュニケーション（56名中26回答）、Ⅱ地域とのつながり（56名中16回答）、Ⅲ生涯学習機関としての学びの場（56名中14回答）、の3

表1 学芸員養成課程による博物館の役割の変化の回答例

項目	回答事例
他者とのつながり	・ただモノを展示しているだけではなく、その裏で多くの人々が働いていて、その地域にとっても大切な場所なのだなと感じた ・博物館は学芸員だけで構成されているのではなく、地域の人たちやボランティアとの協力があって運営されていると理解した
学芸員に対して	・今まで見る機会のなかった博物館の裏側業務、また学芸員業務の多用さを知ったという部分が大 ・好きな分野等だけではなく多くの分野についての理解や作業が必要であるということ
具体的な博物館活動	・パネルの向き、資料のおき方や角度など、いろいろなことを考慮して展示していると知ったから。 ・資料保存にこれだけの設備が必要だということを知ることができたため、改めてその存在の大切さがわかった
漠然とした変化	・博物館の裏（考えや仕事）を見ることによって、より深く博物館を見る視点を持てたため ・一時的に内側の人間となったことで、理解度が深まり、もっと知りたいと思い始めたから
博物館経営	・予算の少なさ、雑務の多さなど知らなかったことを知ったため ・学芸員の業務を学び、実習を行うことにより、博物館に関する厳しい現状をより理解することができた

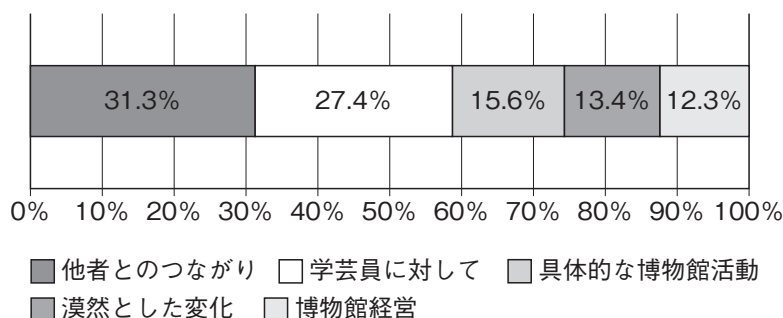


図2 学芸員養成課程による博物館の役割の変化の割合

つに分類できた。②に関しては、Ⅰ．多様な活動・地味で忙しい学芸員が博物館活動を支えている（49名中43回答）、Ⅱ．博物館活動を支える、より具体的な学芸員の役割（49名中6回答）、の2つに分類できた。③に関しては、Ⅰ．展示に至るまでの苦労（28名中19回答）、Ⅱ．多種多様な博物館活動（28名中5回答）、Ⅲ．保存機関としての博物館活動（28名中4回答）、の3つに分類できた。④に関しては、Ⅰ．受講生の知らない博物館（24名中14回答）、Ⅱ．博物館の存在理由（24名中10回答）、の2つに分類できた。⑤に関しては、すべて博物館経営の難しさ（22名中22回答）、に関してであった。

5. 学芸員養成課程受講生の学芸員の役割について

学芸員養成課程で学んだ経験により、学芸員の役割について、受講生はどのように認識しているのかを明らかにする。

ここでも、4. と同じように、学芸員養成課程を通して学芸員の役割について変化の有無を明らかにし、変化があった受講生に対してその理由を自由記入欄にて記入する方法で回答を収集した。その回答内容を分析する。

まず変化の有無を見てみると、有効回答数183のうち、170（92.9%）が変化有と回答した。そのうち、自由記述による回答が見られたのは169（99.5%）であった。

自由記述としてその理由が明記された内容を分析し、分類を試みた。その結果（表3および図3）、

①来館者の学びを後押しするための役割（73名、42.9%）

②学芸員＝雑芸員（58名、34.1%）

③抽象的な変化（24名、14.1%）

④自身の専門以外の知識が求められる（6名、3.5%）

⑤自身の専門領域の知識が求められる（5名、2.9%）

⑥学芸員には経験感覚が求められる（3名、1.8%）

に分類できた。

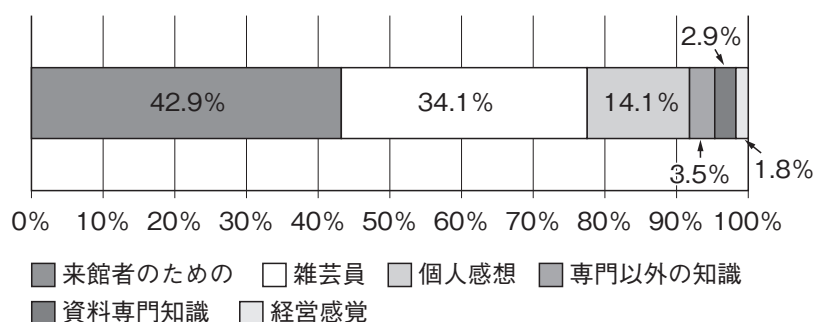


図3 学芸員養成課程による学芸員の役割の変化の割合

表2 学芸員養成課程による学芸員の役割の変化の回答例

項目	回答事例
来館者のため	・博物館それぞれにあった役割はあるが、どの博物館（学芸員）も（地域）社会に貢献できる仕事であること ・地域の教育普及の場としてなくてはならない存在だと理解したから
学芸員＝雑芸員	・自分の専門の研究に専念できるものだと思っていたが、意外と事務に追われて大変なこと ・事務・企画・運営と雑多なものも含め、やることが多い
個人的感想	・学芸員という職業がどんな仕事をするものなのか知らなかったから ・大きな社会的意味を担っていると考えるようになった
資料の専門以外の知識	・教育、資料の保存など意外にも多くの役割理があり、専門以外にも研究が必要
資料の専門知識	・やはり専門知識を学んでいくので、それを活かしがちになってしまうので、一般の人の目線に合わせるのが難しい
経営感覚	・資料の事だけを考えればよいのではなく、経営面の事を考えていかなければならないことを知ったため

6. 考察

今回の分析より、以下のように考察できると思われる。

(1) 学芸員養成課程受講生の博物館及び博物館に関連する興味関心の変化について

博物館そのものに関する変化は、それぞれの項目において、興味関心や利用頻度が増えた（多くなった）割合が7割以上を超えていた。このことから、受講生の多くはより博物館や博物館学に関係する学問領域を深く学んでみたいという要求があると思われる。

生涯学習に関する変化は、生涯学習活動に関する興味関心は7割ほど増えたものの、生涯学習の利用頻度は半数近い受講生は変化がない。このことは、受講生にとって、生涯学習社会を実現するための社会教育機関の一端を担う博物館、という理解は深まったものと思われる。しかしながら博物館の見学頻度よりも生涯学習機関の利用頻度が低くなっていることから、図書館や公民館といった博物館以外の生涯学習機関が行っている活動に興味関心は持ったとしても、主体的にそれらの機関を利用し、受講生自身の生涯学習を深めるための行動にまで至っていないと思われる。

博物館を取り巻く社会に関する変化は、それぞれの項目において、興味関心が7割以上増えていた。博物館の活動対象として、地域社会との連携や、地域社会の課題を解決し、より良い地域社会を作っていくために必要な学びの場が博物館である、という認識を、受講生は深化することができたと思われる。

その一方で、博物館行政や博物館と世界情勢に関する変化は、文化財行政に関する興味関心は6割ほど増えたものの、博物館を取り巻く世界情勢（例えばイスラミック・ステートが占拠した地域の博物館・美術館資料の破壊活動⁴⁾、チュニジアのバルドー博物館来館者が人質になる事件⁵⁾など）や、政治（例えば政治的判断により、博物館の展示内容が変更させられる⁶⁾、選挙公約として博物館の廃止を訴える候補者が当選するなど）に関する興味関心が3～4割ほどの受講生しか興味関心が増えていない。このことは、多種多様な価値観を持つ人たちが成立し、また問題を抱えている国際社会の中で、博物館はどのように活動し、人間が共存するための安全装置としての博物館の根幹にかかわる問題に対処できない人材を輩出してしまう可能性がある。

博物館資料に関連する変化は、受講生の文化財保護に関する興味関心は9割ほど、また芸術・アートに関する興味関心も7割ほど増えている。このことは、受講生の多くは文学部に所属し、歴史系・美術系博物館で博物館実習をしたことから、当然その割合は大きくなる。一方で、理工系学部学科に所属する受講生は極めて少なく、

かつ自然史・理工系博物館での博物館実習を行った受講生も極めて少ないという状況において、自然環境や科学技術、生物多様性といった分野に関する興味関心が増えた割合が、5割前後見られたことは意外であった。博物館が扱う資料や活動領域が多様であることを学び、また学部学科の講義では触れられないことを学芸員養成課程の講義において学んだことによる成果として評価できるものと思われる。

(2) 学芸員養成課程受講生の博物館の役割について

地域社会や来館者に大きな影響を博物館は与えていること、博物館活動を支えるための学芸員の業務に関すること、博物館活動を支えるための具体的な博物館の業務に関すること、を指摘する受講生が多い。このことは、学芸員養成課程における講義において初めて知見を得たものであり、学部学科で扱っている学問領域では扱われない事柄に該当すると思われる。特に、最も回答が多かったのが、博物館活動を主体的に担う学芸員に対する認識の変化の中で、「多様な活動・地味で忙しい学芸員が博物館活動を支えている」であった。このことから学芸員は多種多様な業務－しかもその業務内容は地味であり、また大変忙しい－をこなすことで博物館活動を支えるという、博物館の現状から、博物館の役割を的確に理解したものと思われる。

(3) 学芸員養成課程受講生の学芸員の役割について

来館者の学びを後押しするための役割があること、そして上記(2)と重なるが、学芸員は何でも業務をこなさなければならない「雑芸員」としての役割があること、を指摘する受講生が多い。一方で、博物館の資料に関する専門的な知識を持つのが学芸員である、と指摘する受講生はかなり少ない。このことは、学芸員としてまず必要なのは、来館者の学びを後押しするために必要な知見を得ること、そして博物館の業務をこなすために、受講生自身の専門性にとらわれることなく、博物館は何をするのか、そしてその博物館で学芸員は何をするのか、という考え方を持つことができたと思われる。

7. まとめ

以上のように、学芸員養成課程―旧カリキュラム―を経験・修了した受講生を対象とした、博物館と博物館に関連する興味関心の変化、博物館と学芸員の役割を考察した。考察より以下の点を今後の課題として挙げたい。

- ・受講生の興味関心の変化より、世界情勢や政治に関する興味関心がそれほど増えていないことがわかった。このことから、多種多様な価値観があり、様々な問題を抱えている現代社会において－例えばイスラミック・ステートが占領した地域の博物館の資料や世界遺産が意図的に破壊されたり、チュニジアのバルドー博物館来館者が人質になる事件などに対し、学芸員として何を考え、どのように行動するのかといったことや、政治家の選挙公約に「博物館廃止」を唱える候補者が当選をしたり、博物館活動に対して政治的介入が散見できる現状－対処できる認識を受講生に持つような講義を展開していく必要があるのではないかと。
- ・受講生の博物館学や博物館活動に関する興味関心が非常に増えたこと、また博物館や学芸員の役割について深く認識している。このことから、様々な制約はあるが、通常の講義で終わるのではなく、博物館に関する課題や問題が深化できるような特別講義やゼミナール、博物館実習とは別に博物館でのインターンといった科目－それらの科目は卒業単位に含まれる－を開講⁷⁾するなど、受講生の学びの要求に対応することが求められるのではないかと。
- ・博物館以外の生涯学習・社会教育に関する科目－例えばMLK連携のような科目－を博物館学芸員課程・図書館司書課程・社会教育主事課程それぞれの受講生が受講することを資格授与にあたり必須条件とし、生涯学習社会を実現するための社会教育機関に関係する人材育成に必要な教育を展開する必要があるのではないかと。

今回の調査は、旧カリキュラムの受講者を対象としたものである。東海大学では、2012年度より新カリキュラム―従来の生涯学習概論、博物館概論、博物館資料論、博物館実習のほか、新たに博物館教育論、博物館展示

論、博物館資料保存論、博物館情報・メディア論、博物館経営論が加わった一に基づく養成課程が始まった。今回指摘した部分も、新たに開設した科目を通して受講生は学んでいる可能性が大きい。

今後は、新カリキュラムの学芸員養成課程を修了した受講者と、今回の考察を比較することで、新カリキュラムでは、今回の指摘した部分がどのように変化したのかを明らかにし、より充実した学芸員養成教育に資する知見を得ていきたい。

注釈

- 1) 文部科学省 (2009)『学芸員養成の充実方策について「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」第2次報告書3ページ
- 2) 文部科学省 (2009)『博物館実習ガイドライン』3ページ
- 3) 先行研究としては、玉川大学 (1999)「学芸員の持つ専門的知識等の活用に関する調査研究事業」実行委員会文部省委嘱事業『本学で学芸員資格を取得した有資格者の実社会における活用に関する調査研究』、平成19年度文部科学省委託事業 (2007)『学芸員養成カリキュラムに係る調査研究報告書』や、平成20年度文部科学省委託事業 (2008)『大学における学芸員養成課程及び資格取得者の意識調査報告書』が見られる。しかしながら学芸員資格取得に至った学生数名のみを対象とした聞き取り調査であり、詳しい意識を聞き出す調査内容ではない。
- 4) <http://digital.asahi.com/articles/ASH325J73H32UHB102J.html> (2015年9月閲覧) には、バグダッドのイラク国立博物館再開を巡る動きにおいて、イスラミック・ステートの文化財や博物館資料に関する破壊活動について挙げている。
- 5) <http://digital.asahi.com/articles/ASH3L778KH3LUHB101T.html> (2015年9月閲覧) には、チュニジアのバルドー博物館襲撃事件の記事が掲載されている。
- 6) 金子淳 (2001)『博物館の政治学』青弓社に詳しい。
- 7) 例として、埼玉大学では「学校・地域・博物館実践編」、中央大学では博物館実習とは別に、大学院向けに「インターンシップ (博物館実務研修)」、桃山学院大学では「図書館・博物館への誘い」などが開講されている。

参考文献

- 片桐宏理 1985「北海道の私立大学生の学芸員課程に対する意識調査をめぐって」『博物館学雑誌』第11巻第1号 全日本博物館学会 pp.85-98
- 玉川大学 1999『学芸員の持つ専門的知識等の活用に関する調査研究事業』実行委員会文部省委嘱事業「本学で学芸員資格を取得した有資格者の実社会における活用に関する調査研究」
- 青木豊 2007「博物館法改正に伴う資質向上を目的とする学芸員養成に関する考察」『博物館学雑誌』第33巻第1号 全日本博物館学会 pp.59-78
- 神奈川大学 21世紀COEプログラム研究推進会議 2008『高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラムの提言』
- 文部科学省生涯学習政策局社会教育課 2008『大学の学部において学芸員の資格を取得した卒業者の進路調査』
- 株式会社丹青研究所 2008『学芸員養成カリキュラムに係る調査研究報告書』
- 株式会社丹青研究所 2009『大学における学芸員養成課程及び資格取得者の意識調査報告書』
- これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議 2009年『学芸員養成の充実方策について (第2次報告書)』
- 田代英俊 2010「科学館を含む科学系博物館から見た新しい学芸員養成課程に対する大学への要望」『博物館研究』第45巻第12号 日本博物館協会 pp.15-17
- 高田浩二 2010「新しい学芸員養成課程の運用への期待と課題—動物園、水族館において求められる学芸員像」『博物館研究』第45巻第12号 日本博物館協会 pp.18-20
- 全国大学博物館学講座協議会 2011『全国大学博物館学講座開講実態調査報告書 (第11回)』
- 有富由紀子 2012「博物館実習としての博物館見学の効果」『博物館学雑誌』第38巻第1号 全日本博物館学会 pp.31-43
- 江永是仁 2012「学芸員課程に在籍する学生の学芸員への進路希望に関する考察」『東海大学課程資格教育センター論集』第11号 東海大学課程資格教育センター pp.45-52
- 駒見和夫 2013「学芸員養成教育と大学博物館のアウトリーチ活動の検討」『全博協研究紀要』第16号 全国大学博物館学講座協議会 pp.1-14

- 中村隆 2013「学芸員養成課程の学生の意識に関する調査研究～効果的な博物館実習を検討するために～」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第17号 日本ミュージアム・マネジメント学会 pp.47-53
- 江水是仁 2013「博物館学芸員課程の学びの特徴に関する考察—東海大学の事例より」『東海大学課程資格教育センター論集』第12号 東海大学課程資格教育センター pp.111-120
- 吉田優・築地貴久・中谷仁美 2015「博物館実物資料の活用を想定した博物館学芸員養成教育プログラムの開発に関する基礎的考察—近世村方文書を中心として—」『博物館学雑誌』第40巻第2号 全日本博物館学会 pp.105-131
- 緒方泉 2015「学芸員の学習ニーズに応えた研修プログラムの開発と効果評価」『博物館学雑誌』第40巻第2号 全日本博物館学会 pp.155-166
- 湯浅万紀子・藤田良治 2015「大学博物館における教育プログラムの意義と課題—北海道大学ミュージアムマイスター認定コースを事例として」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第19号 日本ミュージアム・マネジメント学会 pp.43-50
- 緒方泉 2015「新学芸員養成課程に対応するユニバーシティ・ミュージアムの実践調査報告（1）」『日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要』第19号 日本ミュージアム・マネジメント学会 pp.57-61